

Technical Overview

“構想”から“共創”へ

未来を創るための
「感動」の設計学

水素戦略・社長直轄プロジェクト担当
精密機械・ロボットカンパニープレジデント
常務執行役員

松田 義基

「どうせやるなら、楽しくやらなければ意味がない」

2025年の大阪・関西万博で、私はディレクターとして構想と設計に携わりました。訪れた人々の心に強く残るメッセージを発信し、しっかりと受け取っていただけるものになければなりませんし、私自身もせっかくの機会を楽しみたいと思いました。「どうせやるなら楽しくやらなければ意味がない」。これは決して軽い気持ちで言っているのではなく、教育・演劇・絵画・ロボティクス・バイク・水素技術といった私のこれまでの人生を通じて培ってきた、生きるうえでのモットーでもあります。

すべての始まりは、未来の子どもたちへの想いから

かつて私は演劇活動に没頭し、自主劇団を立ち上げ、脚本を書き、演出を手がけ、ステージにも立っていました。だからこそ、仕事において“人の心を動かす”ことには人一倍のこだわりを持っています。今回、ディレクターとして私に声が

かかったのには、そういった理由があったのかもしれません。まず考えたのは、「大阪・関西万博に訪れるのは専門家だけではない。家族連れや子どもたちに理屈抜きですごい！と思ってもらえる体験を届けたい」ということでした。私たちの展示を見た子どもたちが、直接的に「エンジニアになりたい！」という夢を持ってくれるとは限りません。でも、そこで感じたワクワク感は、将来クリエイティブな興味関心へとつながってくれるかもしれない。このような思いが、展示全体の方向性を決める出発点になりました。

今回のメッセージは、「移動本能」というキーワードに集約されています。私は「人間には体を動かすことでしか得られない“ひらめき”がある」と信じているのですが、昨今はAIの進化が著しく、このままでは人間はいつかAIに負けてしまうかもしれないといった声も聞こえてきています。「人間にできてAIにできないことはなにか」。この問いに対する私なりの答えが、「移動すること」でした。さまざまな場所や環境へ移動し、そこで新たな体験や発見、感動をする。これこそがAIには真似できない、

私たち人間にしか持ちえない価値といえるのではないのでしょうか。

「A面」と「B面」——感性と論理の融合が感動を生む

大阪・関西万博における設計思想は、「A面（感性）」と「B面（論理）」の2つの軸を大切にしました。A面は直感的に心を揺さぶる魅力。B面は納得を生む技術的裏付け。この2つの融合こそが、本当の“感動”を生み出すからです。

◎A面 — 感性に訴えるデザインの力

「CORLEO」や「ALICE SYSTEM」といった未来のモビリティは、工学的な機能性から発想するのではなく、「乗ってみたい」「カッコいい」と感じられるデザインを目指すことが重要です。そこで設計はモーターサイクルのデザイナーに依頼しました。なぜなら彼らは、見た目の美しさや存在感を直感で捉える能力を持っているからです。

実は当初、「ALICE SYSTEM」のアイデアに対して私自身は懐疑的でした。正直、ピンと来なかったんです。しかし、プロジェクトメンバーの熱意に触れ、その情熱に応えるべきだと考え直しました。自分に見えていない価値を信じることも、リーダーとして大切な感性だと気づかされたからです。これは今回のメンバーから教わった大きな学びとなっています。体験型のとても良い展示になりました。

◎B面 — 技術と構想で支える“納得”

一方で、感動は“納得”があってこそ成立します。「O'CUVOID」はまさにそのB面を象徴する存在です。スワップブル(交換可能)で並列可能な分散型水素発電ユニットとして、軽量かつメンテナンス性に優れ、コスト面でもリアリティーのある提案になりました。

こだわったのは、技術者や業界関係者の目にも耐えうる、確かな技術的裏付けがあること。水素という当社が長年取り組んできた戦略的技術があるからこそ、ALICE SYSTEMの描く世界は単なる夢物語ではなく、実現可能な未来として受け止めていただけたのではないかと考えています。

「川崎重工版 サグラダ・ファミリア構想」——展示を“共創の場”へ

私は展示を完成品ではなく、「未来への問いかけ」と捉えています。そこに見る人が関わる余白があるからこそ、

次なる創造の源になるからです。

この発想に影響を与えてくれたのは、若い頃に訪れたスペイン・バルセロナにある教会、サグラダ・ファミリアでした。あの建築は完成していない余白があるからこそ、世界中から人と支援が集まり、共創が生まれている。その後も訪れる度にどんどん建築が進んでいった。私はそこに、これからの“コトづくり”のヒントを見出しました。

そうした体験を形にしたのが、羽田空港内に設置した共創拠点「KAWARUBA」です。ここでは社内外の研究者やエンジニア、デザイナーとともに、プロトタイプの進化を重ねています。

「CORLEO」や「ALICE SYSTEM」には、あえて“違和感”や“未完成”な部分を残したのですが、それは次の担い手たちのための余白です。この余白が、サグラダ・ファミリアのように未来への想像力を刺激するきっかけに、求心力になってくれれば嬉しいです。

現実を動かす水素戦略と、モビリティの役割

水素社会の普及には、「安ければ使いたい」「使わなければ安くならない」というチキン&エッグ問題が立ちはだかります。だからこそ、当社では水素100%にも1%にも対応可能な「水素Ready商品」という選択肢を用意しています。

そしてモビリティ分野での水素利用こそが、その突破口になると信じています。過去には、二輪EVやハイブリッド車の開発にも取り組みました。始めは個の力で確信を持ち、チームの力で突破した。その経験から、国内外の自動車メーカーとの連携も積極的に進めているところです。

私たちが投げかける「問い」が、世界を動かす

「CORLEO」「ALICE SYSTEM」「O'CUVOID」。これらは単なる製品ではありません。すべてが「未来への問い」であり、「共創の設計図」なのです。

これからの当社は、完成されたものを届けるだけではなく、「共に創っていける場」を世界に向けて提示していかなくてはなりません。常に問い続け、情熱を持つ仲間たちと出会い、未来をカタチにしていく。夢と技術、感性と論理、個の力とチームの力。これらすべてを融合し、これからも「感動を設計する」仕事に取り組んでいければと思っています。